様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００４１４

研究課題名（和文）初期アメリカ文学における創作活動と「名声」に関する研究

研究課題名（英文）Creativity and the Culture of Fame in Early American Literature

研究代表者
山口　善成（YAMAGUCHI, Yoshinari）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：６０３６４１３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは、西洋社会における「名声」や「パーソナリティ」の文化をコンテクストに、初期アメリカ人作家の創作活動のあり方を分析することから始まり、20世紀における人間関係の組織化についての考察を経由して、個人主義社会アメリカにおける友情論に関する議論へと発展した。他者の承認による自己形成およびそれに基づく人間関係の不安は、通常、20世紀半ば以降のアメリカ中産階級たちの問題として捉えられるが、本研究ではHerman Melville等、19世紀半ばのテクストにその萌芽が顕れていたことを論じ、19世紀半ばのアメリカ個人主義と20世紀半ばの社会関係資本のネットワークとの間の連続性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
20世紀初頭の都市化や産業化が個人の生き方や人々の交際のあり方に変化をもたらして以降、社会的な絆や人づきあいにまつわる問題がさかんに議論されるようになった。さらに21世紀の現在、新型コロナウィルスの感染拡大を経験した我々は人間同士の距離／結びつきについてあらためて考え直すようになった。本研究で明らかになったのは、通常、20世紀以降の問題とされる複雑化した人間関係の不安が、実は19世紀半ばのテクストにその萌芽を顕していたということである。本研究を通じて浮かび上がった「共感」や「友情」といったキーワードは、19世紀から20世紀に渡る共同体構築に関わる言説を再考するための有効な視座を提供するだろう。

研究成果の概要（英文）：This research project began by analyzing creatorship in early national America within the context of the culture of "fame" and "personality." It then proceeded to examine the systematization of human relationships in the 20th century and eventually evolved into a discussion on friendship in American individualist society. The "other-directed" mode of self-fashioning and the associated anxieties about human relationships have commonly been regarded as issues prevalent among the American middle class in the mid-20th century. However, in this project, I have identified the same problems in their embryonic form in 19th-century texts, including works by Ralph Waldo Emerson, Henry David Thoreau, Herman Melville, and Henry Adams. I argue that there exists a continuum between 19th-century American individualist society and the mid-20th-century network of social capital.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：名声　パーソナリティ　友情　個人主義　共感

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、アメリカ文学創成期の出版市場や作家たちに通底する「文学作品の価値をどこに見出すか――作品そのものに備わった独創性か、広範囲に知れ渡った認知度か」という問いを、民主化や産業化に伴って起こった「名声」の性質の変化を背景に再考する試みとして始まった。近年の「名声」の文化史研究の成果（Leo Braudy, *The Frenzy of Renown* (1986)など）によれば、18 世紀半ばから 20 世紀にかけて、西洋社会は民主化、都市化、および印刷・出版技術の発達を経、人々の間にパブリシティとセルフ・プロモーションの実践を徐々に定着させたという。新しい通信手段を用いて、適切に自己を宣伝することができれば、新たに手の届くようになった職業や地位を獲得し、自分自身で人生を切り拓くことが可能になったのである。このような時代に効力を発するのは、自己充足的な徳や業績の積み重ね（character）の報償として得られる栄誉よりも、万人受けする人柄（personality）を上手に売り込むことによる「人気」としての名声だった（Warren I. Susman, *Culture as History* (1973)）。名声は確かな実績に向けられる賞賛のしるしから、パブリシティ活動を通じて広く社会に承認されることによって得られるものへと変貌したのである。こうして、「よく知られていることで知られている」著名人のイメージ流通の時代は始まった（Daniel J. Boorstin, *The Image* (1962)）。

このような「名声」の性質の変化が、独立期から 19 世紀半ばのアメリカ文学を論じる上で重要なのは、当時まだ明確な定義も実績もなかった「アメリカ文学」ないし「アメリカ人作家」の成り立ちが、新しい「名声」の概念を背景にした、パブリシティ先行型の自己形成と同一の仕組みを有するからである。それは、はっきりとした実体を持たないがゆえに、実より名を先行させる自己形成のあり方だった。例えば、Washington Irving は最初の単独著作 *A History of New York* (1809)を、半ばペテンに近い大がかりな広告戦略によって売り出し、自らの存在を世に認知させた。もちろん、結果的には内容が伴ってこその評価だったことは間違いないが、研究代表者・山口は、パブリシティや名声が *Salmagundi* の頃からキャリア晩年に至るまで、Irving の著作の中心テーマだったことを以前指摘している（山口、「笑う歴史家」(2017)）。本研究計画はこの成果をもとに、19 世紀アメリカの他の作家たちの「作家像」の形成や流通、および当時の社会全体における自己形成のあり方を考察することを目的とした。

２．研究の目的

アメリカ文学研究における「名声」のテーマは、情報通信網が発達し、映画やテレビ等の大衆娯楽が定着した 20 世紀以降を舞台に論じられることが多い。しかし、マスメディア時代の著名人たちの不断の自己顕示（および大衆による模倣）による社会的地位確立のプロセスは、初期アメリカ文学における市場と創作活動の関係や「アメリカ人作家像」の形成を考察するうえでも有効な観点だと言えるだろう。従来、19 世紀のアメリカ文学を論じる際、大衆間での人気や金銭的な関心が支配する市場原理は、作家の独創性や自律性に相対するものとして捉える見方が大勢を占めたが、当時の文学市場に関する研究成果（William Charvat や David S. Reynolds など）を経て、近年では市場と創作を単純な対立としてではなく、相互交渉する要素として捉える論考が出てきている（例えば、David Haven Blake, *Walt Whitman and the Culture of American Celebrity* (2006) や David M. Friedman, *Wilde in America* (2014)など）。本研究課題はこれらの先行研究を踏まえ、民主政体下における「名声」の概念とその文化的背景こそ、アメリカ文学黎明期の市場と創作の共振関係を論じるための適切な枠組みであることを例証することを目指した。これにより、「名声」の概念やパブリシティ活動が初期アメリカ文学の創作活動にいかなる影響や主題を与えていたかを解明し、アメリカ文学はじまりの契機に関する新たな見方を提供することを目的とした。

新型コロナウィルスの感染拡大により当初予定していた海外での学会報告や調査が滞ったこと、および本研究計画の中心にある他者の承認による自己形成のあり方についての問いがソーシャルディスタンスの世の中における人間関係の問題に通じていることに気づいたことから、本研究の遂行途中、計画をいくらか修正することになった。焦点は 19 世紀アメリカの作家たちの自己像や文学市場から、彼らが著作の中で描いた自己形成のあり方や社会関係資本のネットワークへとシフトし、また比較の対象として 20 世紀半ば以降の作家についても考察した。他者の承認による自己形成およびそれに基づく人間関係の不安は、通常、20 世紀半ば以降のアメリカ中産階級たちの問題として捉えられるが、更新後の本研究では Ralph Waldo Emerson、Henry David Thoreau、Herman Melville、Henry Adams らのテクストにその萌芽を見出すことをもう一つの目的とした。

３．研究の方法

（1） アメリカ文学黎明期における「作家像」の形成や流通

これは本科研費プロジェクトの開始前から取り組んでいたテーマでもあり、本研究計画はこれを継続するかたちで始動した。具体的には、19 世紀初頭から半ばのアメリカ文学における創作とパブリシティ活動の関係性について、とりわけ自身の「作家像」の流通に自覚的だった Washington Irving と、彼を中心とした the Knickerbocker Group の著作を取り上げて分析する研究

計画である。

（2） 他者の承認による自己形成

Ralph Waldo Emerson の超絶主義は徹底した個人主義を思想的な要としつつも、民主政体化におけるリーダーたちを民衆の承認を受け、民衆の精神と常に一致する「代表的人間」として描いた。他者の承認による自己形成のあり方は、Emerson が取り上げるようなリーダーたち（黎明期のアメリカ人作家たちを含む）だけでなく、民主主義国家アメリカに生きるすべての者に関わる問題であっただろう。このような観点から、19 世紀アメリカの文学作品における自己形成や他人同士の集まりからなる社会の絆がいかに描かれているかを考察した。

社会的な絆や人づきあいにまつわる問題は 19 世紀固有のものではなく、20 世紀を経て 21 世紀の現代の社会においても重要な論題であり続けている。あるいは、人間関係に関する問題が本格的に議論されるようになったのは、むしろ 20 世紀初頭以降、都市化や産業化が個人の生き方や人と人との交際のあり方に変化をもたらすようになってからのことだった。また、新型コロナウィルスの感染拡大を経験し、我々は人間同士の距離／結びつきのあり方についてあらためて考え直すようになった。これらのことを踏まえ、本研究計画は意図的にアナクロニスティックな方法を取った。すなわち、20 世紀以降の人づきあいやコミュニティ形成に関する理論や洞察を随時援用しながら、19 世紀のアメリカにおける友情論を再考するという、いわば 2 つの時代を往復参照する方法である。これにより、20 世紀以降に顕著になってきたとされる人間関係の諸問題が 19 世紀的な人づきあいのあり方にすでに芽を出していた、ということを示すことを目指した。

（3） 個人主義社会アメリカにおける友情論

人づきあいに関わる不安は、さまざまな友情論を生み出した。本研究計画では、個人主義社会アメリカにおける友情論にも焦点を当てた。Melville, *The Confidence-Man* (1857)に描かれた超絶主義的な友情論についての考察を出発点とし、当時の文学作品に描かれた友情のあり方を再考した。キーワードとして着目したのは、人と人とを結びつける原理として当時の友情論に度々言及された「共感（sympathy）」である。この観点では、Adam Smith や David Hume らに端を発する「共感」の思想史のコンテクストから、19 世紀の友情論の特徴を分析した。「共感」による集まりから、理想的なコミュニティを築こうとした当時のユートピア共同体についても考察を行った。

４．研究成果

（1） 「ビデオを返さなければ・・・」—『アメリカン・サイコ』とうわのそらのパーソナリティ」、『アメリカ文学評論』第 26 号、pp. 98-110、2021 年 2 月

文化史家の Warren I. Susman によれば、19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカにおいて、勤勉さと生産に軸足を置く伝統的な道徳観が衰退し、豊かさを謳歌する消費主義が台頭すると、それに合わせて個人の生のあり方も再定義された。厳しく自己を律するピューリタン的な職業倫理の結晶たる“character”にもとづく人間形成のビジョンは、20 世紀になると、マニュアル化され、商品化され、必要に応じて購入することが可能な“personality”をいかにうまく演じるかに、取って代わられた。*American Psycho* に描かれる浪費と自己イメージへの執着の物語は、キャラクターからパーソナリティへの重心移動が、その後一世紀の間に、さらに徹底的に推し進められてきたことを伝えている。

（2） ① 「19 世紀アメリカの友情論における個人主義と共感」、第 58 回片平会夏期研究会プログラム（オンライン会議）、2022 年 8 月 27 日

② 「『詐欺師』の博愛と個人主義」、日本アメリカ文学会中部支部 11 月例会（オンライン会議）、2020 年 11 月 21 日

③ 「友情について—19 世紀アメリカにおける信用と個人主義」、「レジリエンスと不安」合同研究ワークショップ 2020（南山学園研修センター）、2020 年 1 月 11 日

両報告ともに、19 世紀アメリカにおける人づきあいの拡大と複雑化について、個人主義や社会関係資本の観点から論じた。とりわけ①では、Melville, *The Confidence-Man* (1857)と Tennessee Williams, *A Streetcar Named Desire* (1947)の結末場面に見られる奇妙な類似から出発し、見知らぬ者同士のつきあいや社会構築に対する不安について、それぞれの作品が発表された時代背景をいささかアナクロニスティックに往復参照しながら考察した。*The Confidence-Man* 終盤、Emerson や Thoreau らの超絶主義思想を仄めかしながら特殊な友情論が展開される。本報告では、これに Alexis de Tocqueville のアメリカ個人主義論を接合し、本小説を 19 世紀アメリカにおける人間関係の二分化の物語として捉え直した。さらに、Tocqueville の議論を引き継いだ 20 世紀アメリカの個人主義論の知見をふまえ、20 世紀後半のアメリカ中産階級たちが抱えた人間関係の不安は *The Confidence-Man* が描く 19 世紀半ばのアメリカ個人主義にすでにその萌芽を顕していたことを論じた。*The Confidence-Man* は 20 世紀的な人間関係の二重基準——利益重視の人脈作りと功利的な人間関係からの避難所としての「本当の友情」——に関わる不安を的確に予言した作品だと言える。本報告では最後に再び *A Streetcar Named Desire* を取り上げ、そこにおいて共感ややさしさを基盤にした私的な人間関係が功利的な人脈によって駆逐されてゆく様を観察し、Melville

が描く 19 世紀半ばの個人主義社会と Williams が描く 20 世紀半ばの社会関係資本のネットワーク型社会との連続性を指摘した。

（3） 「タヒチのアメリカ人―ヘンリー・アダムズ『アリイ・タイマイの回顧録』における少数民族への同一化と郷愁」、中・四国アメリカ文学会第 50 回大会シンポジウム（オンライン会議）、2022 年 6 月 11 日

本報告では、Henry Adams のタヒチ史、*Memoirs of Arii Taimai* (1901)を欧米諸国による世紀転換期の領土拡張競争の文脈に位置づけ、その上で Adams の著作のキーコンセプトである郷愁と友情の概念から、本書の文学史的、文化史的な意義を検証した。これにより、本書の内容、形式の双方に見られる Adams の葛藤―巨大化・複雑化する現代社会と小さな友情の物語のあいだの摩擦―は、すべてを飲み込むような帝国資本主義的なネットワークとは違った人間関係、さらには民族関係のあり方を示していたと結論づけた。

（4） 「共感の倫理―19 世紀アメリカのユートピアニズムと権威主義」、第 39 回日本アメリカ文学会中部支部大会のシンポジウム（@中京大学）、2023 年 4 月 22 日

これは「名声」と「パーソナリティ」に関する本研究計画から、「友情」と「共感」に関する次の研究計画へと橋渡しする論考である。アメリカ超絶主義者たちの友情論に、ブルックファーム等、当時の共助の思想と実践の文脈を与え、彼らの友情論がいかに個人主義と共感の文化の相互干渉によって特徴づけられていたかを考察した。また、Adam Smith や David Hume らに端を発する「共感」の思想史のコンテクストに、19 世紀半ばのアメリカ文学テクストを位置づけることも試みた。これは今後本格的に取り組む予定の Nathaniel Hawthorne 作品に見られる「共感」言説に関する研究のための予備的な議論になるはずの考察でもある。

その他、Melville, “Bartleby”における友情や共感に関する議論、Emma Willard の *History of the United States, or Republic of America* (1828)における視覚イメージと記憶術との関係に関する論考を本研究計画の研究期間中に行った。

研究期間を一年間延長し、目的と方法の一部修正を経、当初目指していた目的地からは若干外れたものの、次の研究計画につながる成果を上げることができた。上掲の成果をもとに、2022 年度からは新たな科研費研究計画を開始することができた（基盤研究(C)「19 世紀アメリカの友情論における個人主義と共感の相克に関する研究」、2022~24 年度）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山口善成	４．巻 26
２．論文標題 「ビデオを返さなければ・・・」―『アメリカン・サイコ』とうわのそらのパーソナリティ」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『アメリカ文学評論』	６．最初と最後の頁 98-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 翻訳と上書き：Herman Melville, “Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall Street”
３．学会等名 科研費研究会「「翻訳」「注釈」の創作性とフィクション生成をめぐる学際的・理論的研究」（金沢大学金沢駅前サテライト）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 『聊斎志異』の英訳と脚注
３．学会等名 科研費研究会「「翻訳」「注釈」の創作性とフィクション生成をめぐる学際的・理論的研究」（高知県立大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 『詐欺師』の翻訳と注釈についての報告」
３．学会等名 科研費研究会「「翻訳」「注釈」の創作性とフィクション生成をめぐる学際的・理論的研究」（高知県立大学）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 『詐欺師』の博愛と個人主義」
３．学会等名 日本アメリカ文学会中部支部11月例会（オンライン会議）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 友情について：19世紀アメリカにおける信用と個人主義
３．学会等名 「レジリエンスと不安」合同研究ワークショップ2020（南山学園研修センター）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 Bret Easton Ellis, _American Psycho_とうわのそらの文学
３．学会等名 中・四国アメリカ文学会年次大会（香川大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 郷愁と友情：ヘンリー・アダムズ『アリイ・タイマイの回顧録』試論
３．学会等名 筑波アメリカ文学会秋季例会（オンライン会議）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 19世紀アメリカの友情論における個人主義と共感
３．学会等名 第58回片平会夏期研究会プログラム（オンライン会議）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 タヒチのアメリカ人：ヘンリー・アダムズ『アリイ・タイマイの回顧録』における少数民族への同一化と郷愁
３．学会等名 中・四国アメリカ文学会第50回大会（オンライン会議）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 Emma Willard, _History of the United States, or Republic of America_ (1828)における/についての注釈
３．学会等名 科研費研究会「「翻訳」「注釈」の創作性とフィクション生成をめぐる学際的・理論的研究」（オンライン会議）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口善成
２．発表標題 共感の倫理：19世紀アメリカのユートピアニズムと権威主義
３．学会等名 第39回日本アメリカ文学会中部支部大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

1．著者名 新・アメリカ文学の古典を読む会、亀井 俊介、中垣 恒太郎、水口 陽子、森 有礼、森岡 隆、山口 善成、渡邊 真由美	4．発行年 2021年
2．出版社 松籟社	5．総ページ数 288
3．書名 物語るちから：新しいアメリカの古典を読む	

1．著者名 岩津航、上田望、粕谷雄一、佐藤文彦、杉山欣也、山口善成、山本卓	4．発行年 2022年
2．出版社 金沢大学GS教育系	5．総ページ数 75
3．書名 新版グローバル時代の文学	

1．著者名 岩津航、上田望、粕谷雄一、佐藤文彦、山口善成、山本卓	4．発行年 2022年
2．出版社 金沢大学GS教育系	5．総ページ数 60
3．書名 新版グローバル時代の文学　授業用資料	

1．著者名 Yoshinari Yamaguchi	4．発行年 2020年
2．出版社 Brill	5．総ページ数 248
3．書名 American History in Transition: From Religion to Science	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関